

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

寛解状態にある小児がん患者が抱える心理
社会的問題の特徴と社会適応に及ぼす影響

Psychosocial Difficulties in Childhood Cancer
Survivors and its influence on the Adjustment

2013年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

武井 優子

TAKEI, Yuko

研究指導教員 : 鈴木 伸一 教授

本論文の目的は、寛解状態にある小児がん患者を対象とし、(1) 退院後に抱える困難、(2) 病気のとらえ方、(3) 対処法、(4) 退院後の生活を支えるソーシャルサポートの特徴について明らかにし、それらの要因と患者の社会適応との関連を検討することであった。

第1章では、寛解状態にある小児がん患者の適応に関する従来の研究について展望がなされ、患者の適応を考える上で、社会的背景や医学的要因よりも、心理的要因に重きを置く必要性が示唆された。また、患者の適応に影響を及ぼしうる心理的要因として、退院後に抱える困難、病気のとらえ方、対処法、退院後の生活を支えるソーシャルサポートの4つの要因が挙げられた。

第2章では、これら4つの要因に関して、以下の問題点が整理された。すなわち、(1) 退院後に抱える困難に関しては、病気や治療の経験が、退院後の患者の生活において、具体的にどのような弊害をもたらしたのか明らかにされていないこと、(2) 病気のとらえ方に関しては、ポジティブな評価、あるいは、ネガティブな評価のどちらか一方に関する評価が多く、病気を多面的にとらえていないこと、(3) 対処法に関しては、これまで病気や治療への対処法が多く検討されており、病気や治療によって生じる退院後の困難への対処法が明らかにされていないこと、(4) ソーシャルサポートに関しては、退院後の生活において具体的にどのようなソーシャルサポートを知覚しているのか明らかにされていないことであった。これらの問題点を解決し、寛解状態にある小児がん患者の社会適応との関連を検討すべく、本研究が実施された。

第3章は、(1)の問題点を解決するために、寛解状態にある小児がん患者を対象に半構造化面接を行い、退院後に抱える困難の具体的な内容を抽出し、因子構造を確認した。その結果、退院後に抱える困難は、「将来に対する不安」、「病気に関わる対人関係の困難」、「身体状態に関する困難」の3因子10項目から構成されることが示された。また、これらの困難を多く経験するほど、日常生活における苦痛度が高まることが明らかにされた。

第4章は、(2)の問題点を解決するために、寛解状態にある小児がん患者を対象に半構造化面接を実施し、病気のとらえ方の具体的な内容を抽出した。その結果、肯定的なとらえ方、病気に罹患したことへの否定的な想いや諦めなど、11の概念から構成されることが示された。また、これら病気のとらえ方は、患者の適応を予測しないことが示唆された。

第5章は、(3)の問題点を解決するために、寛解状態にある小児がん患者が、退院後の生活において困難に直面したときに用いる対処法について具体的な内容を抽出し、因子構造の確認を行った。その結果、「現状の受け入れ」、「良い面の模索」、「問題の先送り」の3因子11項目が示され、寛解状態にある小児がん患者が用いる対処法の特徴として、直面し

ている問題自体を改善するような積極的な問題解決よりも、現状を受け入れようとしたり、一旦保留するなどして、自身の気持ちを保つような対処法を多く用いる傾向があることが示唆された。患者の属性に関わらず、良い面の模索を行うほど満足感が向上することが示唆された。

第6章は、(4)の問題点を解決するために、寛解状態にある小児がん患者の退院後の生活を支えるソーシャルサポートについて具体的な内容を抽出し、因子構造の確認を行った。その結果、患者の知覚するソーシャルサポートは、「心のよりどころサポート」と「問題解決的サポート」の2因子11項目から構成されることが示された。また、患者の属性に関わらず、ソーシャルサポートを知覚するほど、患者の満足感が向上することが示された。

第7章では、第3章から第6章の結果を踏まえ、退院後に抱える困難と良い面の模索対処、ソーシャルサポートの組み合わせが患者の適応に及ぼす影響について検討を行った。その結果、対処法よりも退院後に抱える困難やソーシャルサポートの知覚が、患者の適応を予測することが示された。また、退院後の生活をおくる寛解状態にある小児がん患者の状態として、①病後も体調が優れず、将来自分がどうなるのか、一人不安を抱えている「体調不安孤立」型、②身体の状態も良く、サポートを利用しながらそれなりに上手く生活しているが、病気になった自分をどう表現していったらいいか戸惑いながら不安を抱えているような「内的葛藤」型、③周囲の人に支えられながら、生活で大きく困らずに生活しているような「生活安定」型の3タイプから理解できることが示された。特に、内的葛藤型に属する患者が最も日常生活において苦痛を感じていることが示され、罹病期間の長い患者や年齢の高い患者に多くみられることから、このような患者に対する支援が重要であると考えられる。

最後に、第8章において、本論文で得られた成果が整理され、寛解状態にある小児がん患者が日常生活を送る際に、対人関係の築き方、体調管理や活動の展開、将来への不安について考慮し対応することの重要性が述べられた。また、本邦の小児がん患者に対する支援として、欧米で実施されているような小児がん患者本人の認知面や行動面に対するアプローチよりも、まずは、退院後の患者を受け入れる環境づくりが先決であることが述べられた。そして、そのような環境づくりとして、小児がん治療におけるトータルケア、復学支援、社会的自立支援の観点から必要な支援に関する示唆が述べられた。